

獲檻の見回りも怖いとお話でした。別の例では、あるゴミステーションで近くにクマが出没しているにも関わらず、屋外にゴミ袋や空き缶などを出す場所がありました。このような場所では、クマを寄せ付けない適切な対策が必要です。

▶ 地域ぐるみのクマ対策へ

昨年度の長野県では、クマ対策について「ワークショップ」と「あり方検討会」という2つの大きな出来事がありました。

■クマとのすみ分けを考えるワークショップ

令和5年11月、私は、とある市町村の会議室にいました。「この辺りにクマが良く出没する。」「〇〇川を渡ってクマが下りてくるんだ。」「ゴミステーションにクマが餌付いたことがあった。」「このクワの木にクマが寄ってくるんだ。」

これは、「ゾーニング管理」を導入するための、ワークショップでの住民の皆さんの声です。「ゾーニング管理」は、ツキノワグマの生息域と人の生活域の境界を明確にしてすみ分けの徹底を図る、というものです。大きな航空写真と地図を数名で囲み、クマの出没情報を出し合います。

ワークショップは佳境に進みます。人の生活域(＝クマ排除地域)と、クマ生息域及び緩衝地域の境界をどこに引くべきか、排除地域での防除対策は、誰が何をするのか。「ゴミステーションはクマに荒らされない構造にできないか。」「果樹園や畑の電気柵は各自でやってもらうべきじゃないか。」「あの川は〇級河川だから市町村でなんとかならないか。」「こここのヤブ払いは地区で継続しよう。」

私は、ツキノワグマ対策の本質が、このワークショップにあると感じました。効果の上がる地域ぐるみのクマ対策への第一歩だと。

■あり方検討会

令和5年10月、イノシシを捕獲するために仕掛けたくくりわなの見回り中にツキノワグマに襲われたと見られる死亡事故が発生しました。平成18年に発生して以来のこと。緊急開催された野生鳥獣被害対策本部会議では、クマ出没地の緊急点検と対策の助言の実施、そして、今後のツキノワグマ対策のあり方を検討することが決定されました。

「長野県ツキノワグマ対策あり方検討会」(以下、検討会)では、専門家や市町村長から様々なご意見を頂戴しました。できる限りデータに基づき科学的な見地から議論いただくよう意を尽くし、黒江研究員などの研究成果も活用させていただきました。

検討会からの提言は、日ごろからのツキノワグマとの棲み分けの徹底に向けた取組と、大量出没時の問題個体の管理などの強化となりました。

大量出没時の個体管理(捕獲)の強化に関心が寄せられがちですが、会議後のメディア取材を受ける私は、

なお、集中点検はクマ出没要因の抽出と対策に役立つだけでなく、県や市町村の担当者が現場でクマ対策員と情報交換することで、対策技術の向上につながると考えています。

(岸元 良輔／NPO 法人信州ツキノワグマ研究会)



捕獲強化だけでなく、ヤブの刈払いなど日ごろの防除対策を基本とするゾーニング管理が、人身被害防止に重要だと伝わるよう気を配りました。

そして令和6年7月、県のツキノワグマ対策方針が決定しました。さて、いよいよ、地域ぐるみの対策につなげていく番です。

■人口減少社会とクマ対策

ゾーニング管理を導入するためのワークショップは、ツキノワグマの生態を知り、その上で自分たちの地域の出没要因を考え、さらに自分たちでできる防除対策を考え実践していくために、非常に重要な過程だと思っています。

しかしながら、冒頭のワークショップでの活発な意見交換が、果たして、どこの地域でもできるのか、心の中では不安を抱えています。高齢者数人しか住んでいない中山間地域では、防除対策の担い手がいけません。十数年振りに訪れると耕作放棄地が広がっていた、そんな地域がいくつもあります。小さな町村では、一人の職員がいくつもの業務を兼務し、専門性の高い職員を確保することができません。状況は今後、ますます厳しくなるのではないのでしょうか。

ICTとDX活用して、知恵をしぼって工夫を凝らして、ズクを出して…今後も我々のクマ対策の改善は続いていきます。しかしそれは、現場で起きている現実を見なければ絵空事になってしまう恐れがあります。

ニュースに映る自分の顔を見ながら、重みのない言葉だと自嘲し、苦いビールを飲むのでした。もっと現場の声を聞かなければ、と思いながら。

なので皆さん、私たちと一緒に、ツキノワグマ対策のワークショップを行いませんか!

(塚平 賢治／長野県林務部森林づくり推進課 鳥獣対策担当課長)

